



## 夢想和歌・連歌 : 学際的研究を目指して

著者	?? 裕雄
雑誌名	國文學
巻	101
ページ	135-159
発行年	2017-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/11135">http://hdl.handle.net/10112/11135</a>

## 夢想和歌・連歌

——学際的研究を目指して——

鶴崎裕雄

はじめに

本稿は、平成二七年二月一日、浜松市の静岡文化芸術大学での中世文学会秋季大会で発表した「夢想連歌——慶長期を中心に——」に基づく。その会場には関屋俊彦氏の姿も見えた。関屋氏とは大学院生以来、四〇年以上に及ぶ親交を得、長年、関西大学で私が非常勤講師を勤める間、公私ともにお世話になった。

中世文学会での私の発表には幾つもの質問や感想が寄せられた。気をよくした私は早速に帝塚山学院大学に帰って、学会での成果を話したところ、学内の研究機関「国際理解サロン」で夢と古典文学の多角的な視野から昨年（平成二八年）二月二五日、帝塚山学院大学でシンポジウムを行った。シンポジウムの論題は「夢との対話——連歌・文学・心理学の視点から——」、パ

ネラーは心理学、特に夢の分析が専門の広瀬隆氏、中国・朝鮮・日本の漢詩文学専門の福島理子氏と私（鶴崎）、コメントーターは情報メディア学専門の中川謙氏であった。このシンポジウムもなかなかの盛況で、シンポジウムの内容は、帝塚山学院大学の『国際理解』<sup>[1]</sup>42号に掲載されたが、本稿では、私の中世文学会での発表を中心に、夢想和歌・連歌のみ、以下に纏めることとする。

なお本稿は、副題に「学際的研究を目指して」と付けたように少しでも他の研究分野、主に心理学・精神医学・情報メディア学・民俗学などの方々にもお読みいただけるように引用資料などは漢字に直し、句読点やルビを施して読みやすいように心がけた。

一 『万葉集』の夢の和歌―『袋草紙』以前―

洋の東西を問わず、古代から夢は、特に夢の中で聞く言葉や詩歌は神の啓示と思われ、我々の祈念や願望を表す文芸作品となつて書きとどめられた。外国にはヤコブの梯子や莊子の胡蝶の夢などがあり、わが国には和歌や連歌に夢想の歌や句が残されていて、『新古今和歌集』巻第十九 神祇歌<sup>一八</sup>の住吉明神の歌、

夜や寒き衣や薄き片そぎのゆき合ひの間より霜や置くらん

などよく知られていて、神や仏の歌を示す「左注」があつて、「住吉の御歌となん」とある。このような夢想和歌は、平安時代中期、保元二年（一一五八）頃、藤原清輔によつて編纂された歌論書『袋草紙』などに載せられるようになる。

これ以前、『万葉集』にも夢の歌は載るが、神や仏の示現や託宣の歌ではなく、恋人を思つて寝た夜の夢や、夢に現れない恋人に恨み言を詠む相聞の歌が多い。少し挙げておきたい。

まず『万葉集』二「挽歌」には、天智天皇の亡くなった時、姓氏未詳の女性の長歌<sup>一五</sup>を載せる。

うつせみし神に堪へねば……君そ昨夜夢に見えつる

天皇が崩御してお目にかかれなないので夢でお会いしたという歌意である。同じく巻第二「挽歌」に「天皇崩之後八年九月九日奉為御齋会之夜、夢裏習賜御歌一首」の題詞（詞書き）の長歌<sup>一六</sup>がある。天武天皇没後八年の持統天皇（天武天皇妃）の歌で、歌の中には「夢」の文字はない。

「夢の裏」の題詞は次の歌<sup>三八</sup>にもある。

夢の裏に作る歌一首

新墾田の鹿猪田の稲を倉に蔵つみて

あなひねひねし吾が恋ふらくは

右の歌一首は忌部首黒麿の夢の裏に此の恋の歌を作りて友に贈り、覚きて誦み習はしむるに前の如し。

忌部首黒麿が夢に見た恋の歌を友達に贈つたところ、友達が前に作つた歌と同じであつたというのである。

巻第二「挽歌」の「皇子尊の宮の舍人ら働しび傷みて作る歌廿三首」中の歌<sup>一七</sup>に、

夢にだに見ざりしものをおぼつかかな

宮出もするか佐日さひの隈廻くまわを

がある。天武天皇と持統天皇の最愛の草壁皇太子が亡くなり、皇太子に近侍していた舎人が陵墓の佐日の隈廻の宮に出仕する時、「夢にも思わなかった」と詠んだ否定の「夢」で、睡眠中の夢ではない。

夢が本格的に詠まれるのは巻第四「相聞」以降である。坂上大嬢おいらつめが大伴家持に贈った歌の一つ四五に、

生きてあらば見まくも知らず何しかも

死なむよ妹と夢に見えつる

がある。大嬢の夢に現れた家持が「あなたとの恋のために死んでもよい」といったのに対して「生きていたら逢うことも出来るのに」と揶揄して詠んだ歌である。

家持には多くの女性と恋歌の贈答がある。その一人、山口女王が贈った歌七六に、

剣太刀身に取り副そふと夢に見つ

何のしるしぞも君に逢はん為

があり、劔や太刀を身につけた夢を見たのはあなたに逢う前兆だったのかと詠む。劔や太刀を身につける夢を見るなど『夢判断』や『精神分析入門』などで知られるフロイトが研究で取り上げそうな夢である。

『万葉集』の恋の夢には、恋しく思っていると思う相手の恋人が夢に現れるという俗信がよく詠まれる。あの人の夢を見るとあの人が私を思っているのである。これは後の時代の『伊勢物語』の九段、「東下り」の歌、

駿河なる宇津の山辺のうつゝにも

夢にも人に逢はぬなりけり

の「夢にも逢はぬなりけり」の恨み言である。駿河の宇津の山で都に帰る修行者に会って、手紙を託し、「起きている現まの時に、寝ている夢の中にもあなたには逢わない。あなたは私のことを思っていないのですか」と詠む。あなたが思ってくれないので私の夢に現れないという恨み言である。

『万葉集』の夢を詠む歌は本稿で取り上げようとする夢想和歌

とは違う。夢想和歌は夢を見る人が詠む歌、詠んだ歌ではなく、神や仏が夢を通して詠む示現や託宣・説諭の歌、または亡き人、特に成仏できず、この世を彷徨う亡者の怨念の歌である。

## 二 夢想和歌 — 『袋草紙』以後 —

平安時代には、夢は神や仏のお告げ、お諭したまはとして歌に詠まれるようになる。夢想和歌である。『日本国語大辞典』（小学館）の「夢想」の項には「①夢の中で思うこと。②夢の中に神仏の示現があること」とあり、『和歌大辞典』（明治書院）の「夢想の歌」には「《歌学用語》夢の中で感得した歌。神仏の示現や託宣に結びついたものが多い。勅撰集の神祇の部に採択される。清輔の『袋草紙』上の「希代歌」の章に「神明御歌」「仏御歌」「神仏感応歌」「亡者歌」が載る。『袋草紙』以後『沙石集』『古今著聞集』などに夢想歌の説話が多く収録されている」とある。『袋草紙』は保元二年（一一五七）頃、藤原清輔が編纂した歌論書で、歌集や歌会、勅撰歌人たちの逸話が集められている。その中、上巻に世のまれな「希代歌」として、次の神社の「神明御歌」が挙げられている。①大神宮御歌（伊勢神宮）、②宇佐御歌（宇佐神宮）、③賀茂御歌（賀茂神宮）、④平野御歌（平野

明神）、⑤稻荷御歌（稻荷明神）、⑥春日御歌（春日大社）、⑦大原野御歌（大原野神社）、⑧三輪明神御歌（三輪明神）⑨住吉御歌（住吉大社）、⑩北野御歌（北野神社）、⑪貴布祢御歌（貴船神社）、⑫熊野御歌（熊野権現）、⑬天宮御歌（六請神社）、⑭蟻通明神御歌（蟻通神社）、⑮新羅明神御歌（新羅明神）である。神の示現や託宣は齋宮や巫女の神憑りにより、または夢想和歌により伝えられる。

その中で夢想和歌を幾つか挙げると、

①の大神宮御歌（伊勢神宮）は、

草の花なびくをまたず露の身の置処なく歎くころかな

是は大中臣すけのみろ輔弘、無<sub>レ</sub>闕之時、祭主事を祈念して寝たる夢に云へる歌也。

⑤の稻荷御歌（稻荷明神）は、

ながきよの苦敷事を思へかし

何なげくらむかりのやどりを

是は近年事也。或僧聊有<sub>二</sub>相論事<sub>一</sub>。稻荷に百日参詣祈念する夢に見也云々。

⑨の住吉御歌（住吉大社）は、

夜や寒き衣や薄き片そぎの

ゆき合ひの間より霜や置くらん

是社破壊之由、奏「帝王」とて見<sub>レ</sub>夢歌也。

前掲の『新古今和歌集』の住吉明神の歌で、『新古今和歌集』の真名序にも「いはむや、すみよしの神はかたそぎのことばをのこし」として、巻第十九の神祇歌の代表歌としている。『袋草紙』より前の永久三年（一一一五）ごろに成立した源俊頼の『俊頼髓脳』<sup>⑤</sup>には、

これ御社の年つもりて荒れにければ、帝の御夢に見せたるまつらせ給へる歌なり。

とあって、天皇の見た夢想和歌とする。『袋草子』の「秦 帝王」と『俊頼髓脳』の「帝の御夢に…」の相違が興味深い。

⑭蟻通明神御歌（蟻通神社）は、

な、わだにわがれる玉の緒をぬきて

ありとほしともしらずやあるらん

是、昔かの明神の社の辺に、旅客の宿る夢に示給歌云々。

とあって、『貫之集』や『枕草子』にみえる蟻通明神の伝承を旅人が夢に見たのである。

『袋草紙』にはないが、和泉式部と熊野権現の贈答歌も記しておきたい。貞和五年（二三四九）ごろ成立の『風雅和歌集』神祇の歌<sup>⑨</sup>、

もとよりも塵に交はる神なれば月の障りもなにか苦しき  
是は和泉式部、熊野へ詣でたりけるに、障りにて奉幣かな  
はざりけるに「晴れやらぬ身のうきくものたなびきて月の  
障りとなるぞかなしき」と詠みて寝たりける夜の夢に、告  
げさせ給ひけるとなむ。

である。和泉式部が熊野詣での途上、汚れとされる生理になった。参詣は控えなければならぬので、「月の障りとなるぞ悲しき」と詠んだところ、その夜の夢に「塵に交はる神なれば月の障りもなにか苦しき」という熊野権現の歌を得た。神との贈答歌、歌による会話である。

『袋草紙』には「神明御歌」の次に「仏御歌」が挙げられている。二、三挙げると、

中比、或僧夢にきよけなる僧三人寄合てよみける歌。一人は「あはれなり」、次の僧「ひはくれかたになりぬれど」、又次「にしにゆくべき人のなきかな」。是無<sub>レ</sub>疑<sub>レ</sub>仏菩薩歟。

朝ごとにはらふ塵だにあるものを  
今いくよとてたゆむなるらん

清水寺観音御歌の最後の歌には、

梅の木のかたる枝に鳥のゐて

花さけくと鳴くぞわりなき

此はての歌は、まづしき女、清水寺に百日参り、なくく、  
折念する夢に、御帳の中より小僧出で来りて云ひける歌也。

など、夢の中で、仏に諭される歌がある。これは『新統古今和歌集』釈教<sub>六八</sub>にも載る。『袋草子注釈』は「鳥」は「貧しき女」、「花さけくくと鳴くのは、身分不相応な富貴の折念を「ワリナキ」ことと諭す歌としている。このように夢想和歌は総て成就

するのではなく、成就せずに諭される夢もある。

神仏を感動させた「神仏感應歌」の一つに、津守国基の歌を挙げる。

としふれど老もせずしてわかのうらに

幾代になりぬ玉津嶋姫

是は堂建立之時、壇の石取りに紀伊国に渡るに、若浦の玉津嶋に神社あり。尋ね聞けば、衣通姫の此所を面白がり給ひて、神と現じて垂<sub>レ</sub>跡給ふ也と云々、彼渡の人申してりければ、よみて奉る也。其夜の夢に唐髪上て裳唐衣きたる女十人許出で来て、嬉しき慶びに云ふなりとて、可<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>石どもを教<sub>レ</sub>之。夢さめて如<sub>レ</sub>教求<sub>レ</sub>之に、如<sub>三</sub>夢告<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>石。令<sub>三</sub>石造破<sub>レ</sub>之、一度に十二顆に破<sub>わ</sub>れ、壇の飴石に剋<sub>レ</sub>之云々。

とある。津守国基は治安三年（一〇二三）住吉社の神主家に生まれ、三十九代目の神主で、『後拾遺和歌集』ほか勅撰集に二〇首入集した白河天皇時代の歌人である。康和四年（一一〇二）八〇歳で没した。

成仏できない亡者の歌の一つに、小野小町の歌がある。

秋風のうちふくごとにあなめく

小野とはいははじすき生ひたり

人の夢に野の途みちに目より薄生ひたる人有り。称「小野」。此歌を詠ず。夢覚めて尋ね見るに有「鬮體」。目より薄生ひたり。取「其鬮體」閑所かんじよに置お此云々。知「小野屍」云々。

絶世の美人、小野小町の鬮體は中世の思想、美意識の代表である。この思想・美意識が夢に現れる。

以上、和歌について述べた。本稿の主目的は夢想連歌であるが、連歌の母胎というべき和歌についても瞥見しておいた。特に注3で記したように、神道宗紀氏のご指摘により『万葉集』にも一応目を通してみた。そこで気付いたことであるが、『万葉集』の夢は、挽歌のような故人を偲ぶ追悼歌や、相聞のような男女の恋情や怨恨が詠まれている。ところが『袋草紙』になると神や仏や亡者といった現世の人間を超越した、人知では計り知れない示現や託宣・論しが夢に歌われる。ここに二つの相違があつて、『万葉集』の夢は広義の夢想和歌、『袋草紙』の夢は狭義の夢想和歌と呼んで良いのではないかと思う。これまでの研究にこのような分析があるのかどうか知らないが、一応の目途をつけて、以下、本論の夢想連歌に筆を進めることにする。

### 三 戦国期の夢想連歌一覽——『連歌総目録』より——

平成二七年度中世文学会秋季大会の私の発表は慶長期の夢想連歌に焦点を合わせた。平成二七年は大坂夏の陣の四百年に当たり、私も講演などを頼まれて、秀吉没から大坂夏の陣までの慶長年間を扱うことが多かった。本稿ではさらに遡り、応仁元年（一四六七）の応仁の乱勃発から元和元年（一六一五）の大坂夏の陣、いわゆる元和偃武までの夢想連歌を眺めることとした。その間、約一五〇年、一世紀半の現存する夢想連歌を『連歌総目録』によって以下、一覽表にまとめる。表は、上より興行の年月日、興行の場所・目的・主催者など、発句、主な連衆（発句・協作者）の順に記す。注目すべき作品には頭にゴシックの○番号を付け、後に解説を試みた。

(興行年・月・日) (場所ほか)

(発句)

(連衆)

①延徳2<sup>一四</sup>・9・\*

住吉法楽

住吉の松こそ道のしるへ哉(五七)

夢想・宗祇(以下宗祇独吟)

延徳3<sup>一四</sup>・6・22

北野法楽

うち解くる氷の隙の朝霞  
染やらぬ色しもふかし木木の庭

発 夢想<sup>2</sup>・脇 御製後の後土御門天皇<sup>58</sup>・勝仁<sup>59</sup>の後柏原天皇<sup>60</sup> (両吟)  
発 無記・脇 親王御方・帥大納言三条西公家・冷泉中納言為孝・

大永3<sup>一五</sup>・11・3

北野法楽

あけほのうはらそ深き風吹く  
散りて猶花にまされる庭の雪

鷺尾中納言隆康・菅宰相五条為学  
発 夢想・脇 氏輝今川・藤松・宗長<sup>96</sup>・為綱

②享祿4<sup>一五</sup>・11・25

大永3<sup>一五</sup>・11・3

あけほのうはらそ深き風吹く  
散りて猶花にまされる庭の雪

発 夢想・脇 宗養<sup>99</sup>

天文10<sup>一四</sup>・3・\*

杵築奉納

名もよしやいなはも吉や池水に  
千世かけて神代いはふや御代の晴

発 脇 夢想<sup>2</sup>・清歩<sup>1</sup>・宗元<sup>41</sup> (以下句上なし)

天文18<sup>一四</sup>・4・\*

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

発 無記・脇 晴久尼子・国久・誠久・宗養<sup>10</sup>ほか

天文21<sup>一五</sup>・11・21

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

発 脇 夢想 (以下句上なし)

弘治3<sup>一五</sup>・2・10

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

発 脇 御・脇 通正<sup>4</sup>・通秋<sup>8</sup>・玉峰<sup>7</sup>・松千代<sup>2</sup>・松寿<sup>3</sup>ほか  
発 無記・脇 椿梶井宮殿胤<sup>13</sup>・禪元<sup>19</sup>・兼右<sup>17</sup>・禪秀<sup>16</sup>・康雄<sup>9</sup>ほか

永祿1<sup>一五</sup>・8・17

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

発 脇 御・元隆<sup>2</sup>・全朔<sup>13</sup>・友世<sup>16</sup>・知春<sup>22</sup>ほか

永祿3<sup>一五</sup>・2・6

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

発 脇 御・元隆<sup>6</sup>・真清<sup>9</sup>・真清<sup>15</sup>・守安<sup>9</sup>・全朔<sup>12</sup>・友世<sup>14</sup>ほか

永祿4<sup>一五</sup>・2・1

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

発 脇 御・真清ほか、現存の第1・第3・第6・第7・第

永祿4<sup>一五</sup>・11・1

大山祇社

雪のひかりはともし火そかし  
仙人のほふ袖かなかすむらん

9・第11(?)の発句が夢想

永祿11<sup>一五</sup>・12・25

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

発 無記・脇 紹巴<sup>49</sup>・策彦<sup>50</sup>

元亀4<sup>一五</sup>・1・\*

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

発 脇 御・吉当<sup>1</sup>・三思<sup>98</sup>

天正3<sup>一五</sup>・6・28

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

発 夢想・勝俊・紹巴・昌叱・心前・英怙・家久・光久ほか

天正3<sup>一五</sup>・7・10・9

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

発 無記・脇 松<sup>1</sup>・紹巴<sup>16</sup>・白<sup>14</sup>・玄旨<sup>14</sup>・玄以<sup>13</sup>・禪永<sup>11</sup>・昌

天正3<sup>一五</sup>・7・10・9

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

叱<sup>15</sup>ほか

天正3<sup>一五</sup>・7・10・9

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

発 無記・脇 松<sup>1</sup>・紹巴<sup>16</sup>・白<sup>14</sup>・玄旨<sup>14</sup>・玄以<sup>13</sup>・禪永<sup>11</sup>・昌

天正3<sup>一五</sup>・7・10・9

大山祇社

風たにもおもふかかたの富士の雪  
行方も晴れ行く空の秋の月

叱<sup>15</sup>ほか

天正4一五・9・25

天正7一五・11・\*

④天正10一五・8・18

天正12一五・2・\*

天正20一五・2・3

天正20一五・8・15

天正20一五・9・19

文祿3一五・1・23

慶長1一五・12・3

⑤慶長1一五・12・19

慶長2一五・1・23

慶長3一五・7・21

慶長3一五・7・29

慶長3一五・9・1

慶長3一五・12・13

慶長3一五・12・13

大山祇社

(秀次||存疑)

大山祇社

大山祇社

忌宮神社

大山祇社

大坂御城

太宰府奉納

新田八幡千句

ちる花に劣らぬほとの大山哉

秋ほこる家はつづきの物ぞかし

こきくる舟のあとの遙けさ

はたちたつゆふつけ鳥のうれしくて

筆もさかゆる柳名子すけ

たち帰るいはれやしるし神無月

月にむすふ句をうつせ宿の梅霞にもくもらぬ月の光かな

岩つたふ声は霧間の磯の波

世をしれとひきそあはする初春の

梅の宮めてたき此代あふ人と

ふるき枕そしほれそひぬる

心もちあふきの風に月出て

波風のたちあにこころつくし路の

あらたまる年の初めにしも国の

御・脇康之<sup>2</sup>・身九糸頼通カ1・等恵<sup>16</sup>ほか

御・脇西歳・豊祐・重常・安任・加雪ほか(句上なし)

御・脇無記・秀次豊臣カ1・紹巴<sup>16</sup>・昌叱<sup>16</sup>・心前<sup>14</sup>・兼如<sup>11</sup>ほか

御・脇宥永・松陰・芦雪・良澄・宮法ほか(句上なし)

御・脇家次<sup>9</sup>・安任<sup>18</sup>・一庵<sup>6</sup>・光秀<sup>17</sup>・吉次<sup>13</sup>・政重<sup>9</sup>ほか

御・脇無記・輝元朝臣<sup>11</sup>・午歳<sup>1</sup>・秀元<sup>9</sup>・元清<sup>10</sup>・元康<sup>2</sup>・元政<sup>7</sup>・春盛<sup>15</sup>ほか

御・脇知久<sup>5</sup>・満色<sup>9</sup>・弥寛<sup>8</sup>・祖讚<sup>6</sup>・一雲<sup>4</sup>・令讚<sup>2</sup>ほか

御・脇無記・脇一道<sup>1</sup>・紹巴<sup>10</sup>・他阿<sup>8</sup>・玄仍<sup>9</sup>・覚阿<sup>7</sup>・景敏<sup>後</sup>

の昌球<sup>7</sup>ほか

御・脇云聖護院道勝12・白聖護院道澄19・右兵衛佐西洞院時盛15・光豊

勤修寺<sup>13</sup>ほか

御・脇太閤秀吉10・准后道澄8・昌叱<sup>9</sup>・重然古田織部6・前左

大臣近衛信輔8ほか

御・脇無記・脇一継<sup>1</sup>・杉<sup>11</sup>・昌叱<sup>12</sup>・春<sup>13</sup>ほか

御・脇無記・脇義光最上9・景敏<sup>9</sup>・昌叱<sup>12</sup>・友益<sup>8</sup>・能札<sup>8</sup>・喜咩<sup>8</sup>

ほか

御・脇無記・栄任<sup>2</sup>・昌叱<sup>12</sup>・友益<sup>8</sup>・景敏後の昌球10ほか

御・脇長俊山中9・紹巴<sup>13</sup>・昌叱<sup>13</sup>・玄仍<sup>10</sup>・景敏後の昌球8ほか

御・脇義弘局津1・其阿<sup>7</sup>・雖歌<sup>10</sup>・定庵<sup>11</sup>・紹意<sup>11</sup>・玄香<sup>9</sup>・

起雲<sup>6</sup>ほか

⑦慶長4一九一五・2・25

朝日かなさかゆる松のほこりけり

発無記・脇ねね女・家康・秀忠・忠吉・康元・秀康・定勝・万千世・お亀・宮増ほか

慶長4一九一五・4・7

大仏

陰ふかき花はときはの林かな

発無記・脇長俊山中・他阿<sup>9</sup>・玄以<sup>9</sup>・紹巴<sup>10</sup>・景敏後の昌琢ほか

慶長5一九一六・1・20

みとり子の幾世へぬへきしるへきて

発無記・脇秀康<sup>2</sup>・長吉<sup>2</sup>・茂連<sup>7</sup>・能舜<sup>10</sup>・能札<sup>10</sup>ほか

慶長5一九一六・1・21

ちるも香は八重九重の宿の梅

発願主・脇照高院道澄<sup>10</sup>・准后<sup>1</sup>・紹巴<sup>10</sup>・日野大納言<sup>9</sup>・昌

慶長5一九一六・1・25

まかなくに水上清き若菜哉

発無記・脇榮任<sup>7</sup>・昌叱<sup>12</sup>・忠季<sup>6</sup>・昌琢<sup>10</sup>・友益<sup>9</sup>ほか

⑧慶長5一九一六・3・7

空も海も汀も山も君かま

発無記・脇満茂<sup>1</sup>・義光<sup>9</sup>・昌叱<sup>12</sup>・友益<sup>9</sup>・昌琢<sup>9</sup>・喜叶<sup>8</sup>ほか

慶長5一九一六・6・27

軒端のみちはなさきてけり

発無記・脇准后御方<sup>1</sup>・御製後隆成天皇<sup>1</sup>・式部卿宮<sup>8</sup>・禪閣<sup>8</sup>

⑨慶長5一九一六・7以前

(家忠没)

なりもなくかさなる年の木葉哉

発無記・脇玄仍<sup>11</sup>・他阿<sup>11</sup>・紹巴<sup>12</sup>・友益<sup>9</sup>・家忠<sup>8</sup>ほか

慶長6一九一六・2・25

朝日さす蓬の矢□国を□

発無記・脇友重<sup>1</sup>・一重<sup>1</sup>・御金<sup>1</sup>・氏女<sup>1</sup>・息女<sup>1</sup>ほか

慶長6一九一六・5・25

栄ゆくや天の下ゆく紅葉哉

発無記・脇安中法橋<sup>2</sup>・昌叱<sup>12</sup>・日野大納言輝賢<sup>10</sup>・右衛門督

慶長7一九一六・1・16

如水公夢想

松梅や末長かれとみとりたつ

飛鳥井雅庸<sup>10</sup>ほか  
発脇・脇円清黒田孝高<sup>11</sup>・幸円<sup>1</sup>・長政<sup>1</sup>・古庵<sup>8</sup>・江青<sup>8</sup>・実右<sup>8</sup>・正全<sup>8</sup>ほか

慶長9一九一六・4・14

雲よりもなをあくるしのめ

発無記・脇秀元<sup>11</sup>・亥歳<sup>1</sup>・玄仍<sup>13</sup>・昌琢<sup>12</sup>・元淳<sup>8</sup>・友益<sup>11</sup>ほか

⑩慶長10一九一六・9・27

白山万句

すゑの人かけ勸進してこそ

発無記・脇宗甫<sup>49</sup>・明宗<sup>51</sup>(両吟)

慶長11<sup>〇六</sup>・2・25

君か代も我ままにこそなれ天か下

発・脇無記・御願主<sup>1</sup>・御長<sup>1</sup>・玄仍<sup>18</sup>・能存<sup>10</sup>・茂連<sup>11</sup>・正

慶長12<sup>〇七</sup>・9・18

よられても立もとふるや秋の草

発・脇無記・元通<sup>12</sup>・色<sup>13</sup>・詮平<sup>7</sup>・清為<sup>8</sup>・実顕<sup>12</sup>・吉延<sup>10</sup>・忠

慶長13<sup>〇八</sup>・2・22

とりもちて雨にこととへ郭公

治<sup>9</sup>ほか  
発・脇無記・脇有尊<sup>7</sup>・勢与<sup>10</sup>・長雲<sup>9</sup>・正雲<sup>9</sup>・友言<sup>9</sup>・快連<sup>8</sup>・

慶長13<sup>〇八</sup>・6・26

豊なる時や幾世の春ならん

良昌<sup>8</sup>ほか  
発・脇一・二・三・四・益・安・寂・珍ほか

慶長13<sup>〇八</sup>・12・16

涼しさやならふにしろき門の前

御・脇忠治<sup>16</sup>・色<sup>22</sup>・吉延<sup>21</sup>・与孝<sup>18</sup>元通<sup>22</sup>

慶長14<sup>〇九</sup>・5・29

近臣依日色猶益

御・脇願主・法橋兼如・南禅以心伝長老・東福不二庵

慶長15<sup>〇〇</sup>・2・2

乗狄おそれさる年や五百年の春

集雲藤長老ほか

慶長16<sup>〇一</sup>・5・3

住吉の浦にあかれは明神の

無記・脇如休・猿丸・友三・如白ほか

慶長16<sup>〇一</sup>・6・9

心さへ直なる道の神参り

無記・脇無記・勝吉<sup>2</sup>・杉<sup>13</sup>・西洞院宰相<sup>時慶9</sup>・勢与<sup>8</sup>・

慶長16<sup>〇一</sup>・11・16

松竹をいはへる神の初まつり

無記・脇道与<sup>7</sup>・玄仲<sup>12</sup>・昌琢<sup>13</sup>・正清<sup>7</sup>・能札<sup>11</sup>・紹由<sup>9</sup>

元和1<sup>一六</sup>・9・21

蓬来の宝の亀をたまはりて

無記・脇願主<sup>1</sup>・彦五丸<sup>1</sup>・光吉<sup>1</sup>・豊仲<sup>11</sup>・永信<sup>13</sup>ほか

豊国社会所

発句Ⅱ漢句

#### 四 夢想連歌の背景

右に挙げた夢想連歌の一覧表より注目したい連歌作品を幾つか取り上げる。

##### ① 宗祇の夢想

延徳二年（一四九〇）九月の住吉社における夢想を発句とした宗祇独吟百韻。これには次の夢想の発句と九九句の宗祇の独吟の前に、かなり長い序文がある（適宜、私に漢字をあてた）。

住吉の松こそ道のしるべき 御（夢想）

遠里を小野のの雪の帰るさ

宗祇

いにし年の冬つかた、雪霰ひまなき比、月の影、星の光もたどくしく、夜深き松のひゞきさへえなやかならぬ、麻のふすまさえかへり、明行影の蓬のまる寝、夢の通ひもたえはつるころ、いかにねしよ哉といふやうに、さまことなる人、発句をうちずんずるとみえて目さめぬ。則下の句をつき侍りしを、思へばはかなしや。この道にふるもの、夢みる事は常の如く思ひながら、さすがにさし置かたくは侍れど、近き年比は世のうきふしもかぎりなきに、うちそ

へて、みたり風いとゞしくて、言のはくさ色衰へ、心のたねもくちはてぬれば、おもひつゞけんも物うくて過行程に、年くれ春かへり、秋さへ半過ぬ。齡すでにいにしへもまれなる年にあたり、よるくくの寝覚心細くて、萩の音、鴈の涙に催さる、袖のうへやらんかたなし、さるは今一度神にまかり申もせまほしきを、手向の物、又何かはと心の幣取敢はずながら、こしかたの二句につずそへて、迷はん道のしるべにもとおもふ心しかなり。

宗祇

此百員員齡古稀のよし侍れば、明応元比にや。写本端つくりには享祿五極月と云々、これは筆者のしるせし時のを心なくはしにしるせしにや。

かつて、宗祇は、雪や霰の降る寒い夜、夢に異様の人物が現れ、「住吉の松こそ道のしるべき哉」という夢想句を感得した。寒い夜の住吉の神、それは『袋草紙』に記された「夜や寒き衣や薄き」の夢想歌の神である。幾年か後、宗祇は感得した夢想句を発句に独吟百韻を住吉の神に奉納した。手元にある静嘉堂文庫の連歌集書をテキストにした。

宗祇の紀行文『筑紫道記』にも夢の記事がある。文明一二年（一四八〇、右の住吉奉納独吟百韻の一〇年前）周防の大内氏を

訪ね、筑紫に渡り、太宰府天満宮に詣でる。その途中、遠賀川右岸の木屋瀬（北九州市八幡西区）に泊まった夜、

暁近き夢に、誰となき男、天神と名乗りて、扇を予に給はると見侍りて夢醒めぬ。則同行に語れば、皆ことぶき合へり。誠に神の冥助あるにこそと頼もしくなむ。

とあり、さらに太宰府に着いて、宿坊の満盛院では、

深野筑前守といふ人来る。この郡の郡司也。扇を携へて、心ざす当社にて此扇を得る事、夢の告思ひ合て、いとゞ神慮有難くなむ。

と記す。道中、天神と名乗る男から扇を得る夢を見た。そして太宰府の天満宮で実際に扇が与えられた。これは夢ではなく現実。実に天神から扇を賜ったと宗祇は喜んで記した。

## ②今川家における連歌師宗長

享祿四年（一五三二）一月二五日の夢想連歌は、宗祇の弟子宗長が仕える今川氏親の息氏輝の夢想句が発句である。脇は

夢を見た氏輝、第三は藤松、四句目から九九句目までは宗長の独吟、揚げ句は為綱、執筆を務めたのであろう。この百韻も右の住吉社における宗祇夢想百韻と同じく、静嘉堂文庫の連歌集書に載る。発句から四句目までを見ると、

明ほの、うはらそ深き嵐ふく  
狩する雪に月のこる比  
御（夢想）  
氏輝

水こほる野をふみしるき駒なへて  
朝とく出る宿のたひ人  
藤松  
宗長

これにも次のような序文がある。

御夢想とていか、申候へ共、独吟にさせられ候、廿五日未明より其日の五時にやうく仕候。如斯老耄共の欲楽と覚え候。

この年、享祿四年、宗長は八四歳、翌年、享祿五年（天文元年）三月六日に没する。亡くなった年月日は三条西実隆の日記『実隆公記』などで明らかであるが、亡くなった場所は明確ではない。宗長自身の晩年の記録である『宗長日記』は、この百韻

より一ヶ月程前、享祿四年一〇月あたりで終わっている。宗長の亡くなった場所については、宗長の自庵の柴屋軒（九子の柴屋寺）が考えられるが、どうも最晩年には小田原か鎌倉辺りにいた可能性もある。その点、この氏輝の夢想句は、宗長の亡くなった場所の手掛かりとなるかも知れない。この百韻、駿府や九子で詠まれたのか、小田原か鎌倉で詠まれたのか、藤松や為綱が有力な手掛かりとなるかも知れない<sup>10</sup>。連歌とは直接関わりがないことではあるが史料としての連歌の一面である。

### ③④秀吉・秀次連歌に疑問

天正三年一〇月九日の百韻には疑問がある。脇を詠む「松」である。連衆名の松は一字名（連歌名）といって、高貴な身分の者、例えば親王や門跡の准后、摂政・関白・太政大臣といった高位高官が和歌や連歌を詠む時の作者名、いわばペンネーム、同じ連衆に「白」とあるのは聖護院門跡道澄（後に照高院）の一字名、慶長一三年一二月一六日の百韻の「色」は桂離宮を造営した八条宮智仁親王の一字名である。ここで見る「松」は秀吉の一字名である。問題は天正三年の段階で秀吉が一字名を名乗る身分であったろうか。第一、細川藤孝が「女巨」を名乗るのも、信長が亡くなった天正一〇年の本能寺の変以降である。

「天正三年」という年号に誤りがあるのか、または「ゆたかにも公家殿上人のこころ哉」という夢想の発句そのものを偽作として疑うべきか。高位高官を望み、高貴な出自に憧れた秀吉を取り巻く夢想連歌なので疑問が起る。

同様に、天正一〇年八月一八日の秀次が第三を詠む百韻にも関わる。連衆名の秀次に「豊臣カ」としたのは私（鶴崎）である。夢想連歌にはこのような疑問が多い。夢想の特徴といえよう。

### ⑤朝鮮出兵前の秀吉の夢想連歌

朝鮮出兵の文祿の役が一応の停戦を迎え、慶長元年（一五九六、文祿五年）九月、明国の使節を迎えたが講和は決裂、再度朝鮮出兵が計画された。慶長の役である。十一月、秀吉は夢で住吉明神の歌を感得、秀吉は早速、細川幽斎に話した。この時の記録が細川家の家記の一つ『緋考輯録』<sup>11</sup>に記されている。

慶長元年丙申文祿五年十一月廿七日改元（略）

一 十一月、大閤御夢に和歌を得給ふ、幽斎君是を御祝し被成候、御歌序文ともに、慶長のはじめの年、仲のふゆ、大坂の亭にうつりおはしまし、比、奇瑞の異夢を感ぜらる、

事あり、其和歌にいはく、

世をしれとひきぞあはする初春の

まつのみどりも住よしの神

凡靈夢あり、喜夢あり、むかし黄帝夢に華胥<sup>かしよ</sup>氏の国にあそぶ、さめての後天下大に治れる事、彼境のごとしといへり、又殷高宗の良佐を得て、国家盛なりし事、めでたき夢のためし也、中につきて松ハ十八公の名あり、これ又丁固の夢に感ぜし嘉兆にあらずや、抑住吉の御神ハ、西の海の遠き塩ぢよりあらはれ出て、ちかきさかひに迹を垂給へり、たゞこの我朝を鎮護したまふのミにあらず、はるかに異国征伐の御ちかひ専なるがゆへに、神功皇后の三韓を平げ給ひし時も、此御神ことに威猛を施したまへりとぞ、されバこの秋津洲、四の海、波の声せずして、こまもろこしもなびきしたがひたてまつる事、たゞ此時にあり、其久しき行さを思ふに、住吉の松に、こ松のかげをならべつゝ、一木々々に、千よをかぞへても、勁節枝さかへ、貞姿色みさほにして、猶かぎりなき御齡なるべし、いまこの事をきくぞ、をろかなる心にもよろこびにたへす、いさ、か筆をそめて祝詞をたてまつるといふ事しか也、 法印玄旨上

住よしの神の恵もあらはれ

君か八千よを松のことは

慶長元年二月一九日、秀吉は大坂城において、この時の感得した和歌の上句を発句に、下句を脇句にして、百韻連歌を催した。再度の朝鮮出兵の予祝連歌である。その初折表八句は次の通りである（宮内庁書陵部本による）。

世をしれと引ぞ合はする初春の（御）

松<sup>のい</sup>もみどりの住吉の神

つばみぬる梅枝く咲<sup>ひと</sup>そへて

朝なくのうぐひすの声

長閑なる日かげに雪やとけぬらん

月は葉分の軒の呉竹

簾まくそでに吹くる秋のかぜ

外面の霧のはれわたる空

大閣

照高院准后

昌叱

日野新大納言

烏丸大納言

広橋中納言

連衆を見ると、大閣は秀吉、照高院准后は既述の聖護院道澄、昌叱は紹巴とともにこの時代を代表する連歌師（紹巴は文禄四年、秀次事件に連座して流罪、近江に謹慎中、第一線では昌叱が活躍）。日野新大納言は輝資、烏丸大納言は光宣、広橋中納言

は兼勝、ほかに、重然とあるのは、利休没後急に茶道界で勢力を得た古田織部、織部は茶道で名が知られる以前、連歌に熱心で、紹巴や昌叱と親しかった<sup>12)</sup>。連衆の最後、前左大臣は近衛信輔、これより以前、左大臣を辞退し、勅勸を蒙り薩摩国坊津に配流されていたが、慶長元年九月に許されて帰京した。後、信尹のふたと称した。このように秀吉好みの高位高官を集めた連衆である。

#### ⑥ ⑧ 地方大名最上義光の夢想連歌

慶長三年（一五九八）七月二一日と慶長五年三月七日、上洛中の出羽の大名最上義光は連歌師の昌叱・景敏父子たちと二つの夢想連歌を催している。景敏は後に昌琢を名乗り、ともに里村南家の初代・二代である。一つ目の夢想連歌は、秀吉が慶長三年八月一八日に亡くなったので、秀吉没一ヶ月前の連歌である。また二つ目の夢想連歌は、関ヶ原合戦勃発の慶長五年九月一五日の六ヶ月前である。しかし義光は関ヶ原合戦よりも前に帰国している。隣国の会津の上杉氏が家康と敵対して石田三成に与し、不穏な動きを見せていた。義光は家康の勧めで六月には帰国の途につき、最上軍と上杉軍の合戦は、関ヶ原合戦よりも早く、九月一一日、最上領内で始まった。しかし関ヶ原合戦での石田軍敗北の報せにより上杉軍は撤退し、最上義光は勝利

を得た。<sup>13)</sup>

慶長三年と慶長五年の二つの夢想連歌には秀吉の不調や徳川・石田の対立といった政情の不安は窺われない。二つの夢想連歌の連衆喜伴は義光の家臣筑紫喜伴、後の上杉軍との合戦で戦死した。二つ目の夢想連歌で脇句を詠む満茂も義光の家臣で本莊氏、脇句を詠むので満茂の見た夢想句かも知れない。満茂が夢想のことを義光に話し、昌叱・景敏たちを招いて催された連歌会か。連歌好きの主従が想像される。最上義光の連歌については山形市の最上義光歴史館刊行の『最上義光連歌集』一〜三に、国会図書館の連歌合集ほかの影印と翻刻を載せる。<sup>14)</sup>

#### ⑦ 家康にまつわる夢想連歌

⑧と⑦の順序が逆になるが、最上義光の二つの夢想連歌の後に徳川家康にまつわる夢想連歌を挙げる<sup>15)</sup>。京都大学文学部図書館所蔵「漢和雑懐紙」（国文Gm1）に載る慶長四年（一五九九）二月二五日の「夢想連歌」である。連衆名の下の（ ）は私に付けた。

慶長四年二月廿五日

夢想連歌

朝日かなさかゆる松のほこりけり

四方の霞をはらふ松風

春の海残らす波も治りて

釣にくらせる船そ長閑き

急雨や芦のそよきと成ぬらん

月にあまたの雁渡るなり

いねかたき夜長さも猶草枕

秋のあらしを野へのかたしき

山かくる里より霜も降初て

下葉落そふ陰のむら竹

暮ぬれは□の光爰かしこ

池水ちかきはしむ涼しも

萍は波の行衛にかたよりて

つなく間あらず渡りするふね

袖は只たえぬ市路の帰るさに

笠かたふくる雨のをちこち

問よらんやとりは見えず野は暮て

ほのか也ける峯の月代

霧やまた山かたつきて残るらん

吹たゆみたる秋の川風

ね、女

内大臣 家康

中納言 秀忠 (家康三男、二代将軍)

忠吉 (家康四男、清洲城主)

康元 (家康と、異父兄弟)

秀康 (家康と、異父兄弟)

定勝 (家康と、異父兄弟)

万千世 (家康五男、水戸城主)

お亀女 (家康長女、奥平氏室)

宮増

おね、

宮千世

長福丸

松千世 (家康六男、高田城主)

国千世

はあ女

おさい女

祖景

正直 (保科氏、室は家康妹)

散花をせ、のしからみかけ留て

春も立行かけの藤波

時鳥弥生の末の一声に

暮、も分ぬ旅のやすらひ

余波猶酒の盃扱かさね

祭の場を帰る衣手

さすも只小舟の棹の隙をなみ

よとみもあえぬ波の早川

降雨は見るかうちより晴とをり

右政

家清 (竹倉松平氏)

康隆

康景 (天野氏、家康幼少の臣)

玄与

周安

忠賢

三益

伊長 (松平氏、伏見城で戦死)

この夢想連歌は誠に興味深い。連歌のあった慶長四年(一五

九九)二月といえ、関ヶ原合戦の一年半前である。しかも、

秀吉没後の豊臣政権の維持を任された五大老の内、前田利家が

閏三月三日に病没し、これを契機に加藤清正や黒田長政ら秀吉

子飼いの武将たちが石田三成を襲撃しようとし、三成は家康の

許に逃げ込み、近江国佐和山の自領に追いやられるといった政

局変換の慌ただしい時期の直前であった。懐紙によれば、連歌

興行のあったであろう家康の館やその周辺に連衆である家康の

息子や弟たち、嫡子(三男)秀忠・忠吉・異父弟松平康元・次

男結城秀康・異父弟松平定勝・五男万千世が集まっていたこと

になる。秀吉や利家没後の不安な政情で、この連歌によって一族郎等の引き締めや団結が図られたと考えるなら、真に興味深い史料である。宗教的な夢想連歌の故にいっそう興味深い、十分な史料批判が行われなければならない。

なお二四句目の二折表二句目「暮、も分ぬ旅のやすらひ」を詠んだ天野康景は、この時、六三歳。幼少より小姓として仕え、家康の人質時代、尾張・駿河に従い、三河三奉行の一人であった。『寛政重修諸家譜』に、

天正三年正月康景が下女夢に連歌の句を覚ゆ。さめて忘れず。これを康景に告。康景其句吉兆なりとおもひたゞちに言上するのところ、二十日御鎧の賀儀あるにより、この道の宗匠をめし、夢想の句を発句として連歌の会あり。この年長篠の御合戦勝利ありて武田家の勢ひ、や、おとろへ、終に患を除かれしかば、毎年嘉例としてこれを行はる。

とある。

もう一つ、家康の誕生と幼名にまつわる夢想連歌を挙げる。

愛知県碧南市大浜の称名寺に伝わる『東照山松樹院称名寺開山ヨリ歴代年譜』に、

一、当寺十五代其阿上人一天大和尚……連歌之達人二而 広忠公御召二付 岡崎御城江月毎二登城にて、折々 広忠公天満宮江御参詣ニテ 御連歌有て格別帰依僧也。天文十二年二月廿六日夜 広忠公天満宮より 御連歌御発句御感得二付 其阿上人一天大和尚江 御相談有て御夢想聞之御連歌天満宮於神影前御興行有之、同年十二月廿六日夜東照宮御誕生被為遊、依之若君江 御幼名奉差上候様蒙仰候二付 御連歌之御脇句江 竹千代君と奉献上候処、御満悦有て御文台・御硯箱・御懐紙・御硯・御水入・銀子・巻物等を拝領。于今所持大切宝物ト云。

とある。称名寺には別に、この夢想連歌の第七句までの懐紙が丁寧に表装されて伝わっている。

天文十二年二月廿六日夜

於称名寺披

夢想之連歌

神ノのなかきうき世を守るかな

めぐりはひろき園のちよ竹

玉をしく砌の月は長閑にて

かすみのひまにはふく友鶴

広忠

其阿

政家

雪はまた残るうらわの明離れ

弘光

作る田中の道あらはなり

易屋

五月雨に晴ましらるゝ里つたひ

相阿

この家康誕生にまつわる夢想連歌の伝承は、家康より家宣までの歴代徳川將軍の和歌や連歌の選集『富士の煙』（近藤守重撰、文化一四年（一八一七）の序、内閣文庫ほか所蔵）にも載る。

### ⑨ 三河武士松平家忠参加の夢想連歌

⑥⑧の最上義光と同じように、上洛した連歌好きの地方武士は喜々として都の連歌師たちと交流した。『家忠日記』<sup>[18]</sup>の記主松平家忠もその一人である。家忠は徳川家康と同じ三河の松平一族の国人領主であったが、家康の成長とともに近世大名への道程が日記によく示されている。それにともなつて家忠の連歌の形態・座の持ち方・連衆の顔ぶれが変化する。<sup>[19]</sup>

家忠は、文禄三年（一五九四）家康に課せられた伏見城普請のため上洛した。この頃から日記の記事は少なくなるが、早速、「京都連歌衆」と交流を持ち、その時の連歌懐紙の写本が国会図書館の連歌合集などに五つ残っている。その一つが、富山県立

図書館志田文庫の慶長五年七月以前の「なりもなく……」の夢想百韻連歌である。発句・脇は夢想で、本来、「なりもなくかさなる年の木の葉哉」と「陰はかなしき庭の松風」一首の歌を上句と下句に分けて、発句と脇に仕立てたのであろう。第三を詠む玄仍は紹巴の長男で、里村北家の二代目である。この夢想は玄仍の夢ではなく、夢想を感得した連歌会の主権者の依頼によるものだと思う。その連歌に、家忠は誘われた。きっと良いスポンサーの一人であつたのであろう。

この夢想連歌の興行年は不明である。『連歌総目録』には「一六〇二（慶長七年）以前の成立」とするが、これは紹巴の没年を基準としたもので、家忠は、関ヶ原合戦の前、家康軍が会津討伐に出陣した留守、伏見城を準備して、石田方に攻撃されて戦死しているので、「一六〇〇（慶長五年）以前」となる。

### ⑩ 『白山万句』の発端―消え墨して障子に書き付け―

慶長一一年（一六〇六）一〇月から翌一二年一二月にかけて、加賀前田藩では全藩あげて白山社（白山比咩神社）奉納のため万句連歌の興行が行われた。<sup>[20]</sup>慶長一一年といえば関ヶ原合戦と大坂の陣の中間の時期である。徳川方が豊臣方か、結末を知っている現代の我々と違って、当時の人々は暗中模索、未来に不

安を抱きながら両陣營の間をさまよったことであろう。私（鶴崎）は全藩あげて白山社奉納の万句連歌の興行は、家中の統一、前田藩の団結に役立ったのではないかと考えている。<sup>(21)</sup>それはともあれ、この大々的な万句連歌は前田利家の家臣北村宗甫が同僚の鷹栖明宗を誘って詠んだ夢想連歌千句から始まった。白山比咩神社に現存するこの千句の序に、

此千句は、ある夜の夢に、白山の神前におみて千句の連歌  
□□しく、「末の人かけ勸進してこそ」と申句を見奉しを、  
いろりのきえずみしてしやうしに書付侍りぬ。然処に、翌

日、大納言利家御在洛之比、東の御方より「白山之堂社とも破壊しける事かなしひにたへ給はず、いそぎ再興せよ」との御使ありしにこそあやしき夢想なりけれど人みな申されし。されは御奉加とも数をつくされし。しかはあれと、末の世の衆生えんをむすほしめんたよりもやと、御あつかりの国く、たかきいやしきをす、めよとの事、波着寺安養坊空照法印に命せられ、いく程なく造立の事になりぬ。(略) 則造畢せし。慶ひ長き元丙申申中之秋廿日あまり七日と申に、遷宮有し也。其折から、此事とりおこなひ奉るへかりしを、心ならず過しもてこしに、今度又夢のさとし

めなどあるにより、人かすをあつむるもことくしければ、ひそかに鷹栖久左衛門尉明宗を□□ひ□□なる心くを五百、二人のこのの葉につゝり、御宝殿にこめ奉りぬ。かたはらいたき事共なれと、神慮にまかせ、嘲哢をもちへり見□□ゆ□□の御方御□□穩にしてい□□久の奇瑞ならん□也。

于時慶長十年乙巳九月廿七日

北村三郎右衛門入道

宗甫

右の大意は、或る夜、北村宗甫は白山社の神前で、「末の人かけ勸進してこそ」という句で千句連歌を始める夢を見た。「末の人かけ……」の句は七・七の短句である(後の千句は短句から始まる脇起し連歌)。その頃、利家は京都や伏見にすることが多く、宗甫が夢想句を得た翌日、利家とともに在洛中の東の御方(利家夫人まつ、後の芳春院)より白山社再興の造営を命ずる使いが下った。造営の使いがあつた前夜の夢なので皆は「奇しき夢想」といった。白山社の造営は慶長元年に完成し、八月二七日に遷宮が行われた。その後、再び夢の論しがあつて、鷹栖明宗とともに両吟千句を行ったのである。

この序文中、目を覚ました宗甫が夢想句を「いろいろのきえずみしてしやうしに書付侍りぬ（囲炉裏の消し炭で障子に句を書き付けた）」とあるのが面白い。感得した夢想句を忘れないように書いた具体的な記述である。

### ① 夢想の漢和聯句

『連歌総目録』より摘出した夢想連歌の最後に漢和聯句をあげる。慶長一四年五月二十九日、発句は漢句で「近臣依日色猶」。このような漢句による夢想連歌もあるということを示すため挙げたまでである。夢想句を感得したのは脇を詠む願主であろう。法橋兼如・南禅以心伝長老・東福不二庵集雲藤長老といった禅宗の僧侶が連衆である。

## 五 その他、日記・古記録に見る夢想連歌

『連歌総目録』のほか、これまで私（鶴崎）の関わった資料から夢想和歌・夢想連歌を二、三挙げてみたい。

文亀元年（一五〇二）から永正元年（一五〇四）九条政基は直務を行うべく九条家の莊園和泉国日根莊（大阪府泉佐野市）に下向した。その時の日記『政基公旅引付』<sup>22</sup> 文亀元年四月二八

日条に、

午剋許聊付枕之処、於九条亭御料人之被沙汰発句とて夢想  
二、

わせとかれ日根野につ、く入山田

尤祝着了、

とある。日根莊にいる政基が、京都の九条邸の嫡男尚経が「わせとかれ……」の発句を詠んだ夢を見たというのである。

文亀三年六月二五日条には、

今日一段天満宮敬心之日也、又此寺<sup>長福寺</sup>鎮守天満天神也、  
仍連歌百韻帳<sup>23</sup>行畢、予発句、声清きめくみや松の青あらし

とある。二五日は連歌の神天満天神の祭日で、「声清き……」の発句を詠み、連歌百韻を奉納した。二日後、六月二七日に、

去夜寅剋許夢想、百草の花や錦の手向くさ、一昨日之法楽  
有納受瑞夢也、

とある。夜の夢に天神の詠む「百草の……」の夢想句を感得した。一昨日の奉納連歌が納受された瑞夢だと喜ぶ。

慶長一〇年（一六〇五）一月一九日に淀殿の夢想連歌が豊国社に奉納された。『時慶記』慶長一〇年一月一三日条に、

於豊国社秀頼母公御夢想連哥、来十九日可參勤旨有触、速水友益・吉田ヨリ喜介有使、則対面候、奉旨申入、

一月一九日条に、

未明ニ豊国へ詣、連歌於神前在之、大坂御袋御夢想也、堂上日野前大納言・広橋大納言・勤修寺中納言・吉田二位・藤宰相・平宰相・光広朝臣・季康朝臣・昌琢・友益朝臣・禅昌、長俊ハ山中山城守也、景次・元偕、時直ハ執筆也、  
…（中略）…申刻ニ満、又如元立テ先所ニテ食アリ、魚類也、

とある。この淀殿の豊国社夢想連歌奉納について『舜旧記』にも詳しい。慶長一〇年一月一九日条に、

十九日戊子 天晴 於社頭夢想連歌百韻興行、於大坂御裏様申来也、則御袋御夢想也、

春駒や若草山に立出て 御夢想

おもふ事なき事そうれしき 同

長閑にもなるや心やさそふらん 御願主

雪とけけらし軒のたま水 吉田二位

霞より釣簾に光りのさしうつり 日野大納言

袖にまちとる半天の月 広橋大納言

暮過る道のかたへの秋す、し 勤修寺中納言

なひきあひたる霧の村竹 藤宰相

八句之分 如此 連衆

日野大納言・広橋大納言・勤修寺中納言・藤宰相・西洞院・

烏丸頭弁・正親町少将・少納言時直・山中山城守長俊・松

梅院祥昌・逸見友益・昌脈・景次・大蔵大輔元偕、以上十

四人

とある。生前、秀吉が建立に力を注ぎ、後に靈廟となる豊国社は、慶長七年一二月に炎上したが、再建されて慶長一〇年一月二日より秀頼女房衆が豊国神前で七日間の祈祷・大護摩・千度祓・巫女神楽廿一座奉納、一八日には七日間の御祈祷が結

願した。結願の次の日、淀殿の夢想連歌奉納が行われたのである。

最後に『月照寺明石柳家社奉納和歌集』<sup>26</sup>の内より、近世後期、天明二年（一七八二）の夢想和歌を紹介したい。藤原良徳なる人物の奉納であるが、序文からは夢想の和歌・連歌が信仰と深く結びつき、奉納にされる過程が窺えるのである。

人麿明神へ年月々歌よみて奉りけるに、多枯の浦のそこさへにはふ藤なみをかさしてゆかむみぬ人のため、といへる神詠にもとつき藤の題にて、多この浦のそこさへにはふそれならてあはれはかけよやとの藤浪、かくよみて此道に志の年有る事を歎き告げ奉ける夜の夢に、まさしくも神慮より一首の歌を給ふと見る。その、ち又思ひはからずも、頓阿の彫刻之尊像を得たり。是によりかれによりて、おもひめくらはせは、年月の感返ならんと仰けは、いよく高きおもひをなしぬ。よりにて夢想の歌を一字つゝ、わかちて、人々にも請ひ、みつからもよみて播州あかしのみやゐに奉納し侍る、其ことはりを誌す。

### 夢想歌

しきしまの和歌の浦人なれをしそ

あはれとおもふとしのへぬれは（中略）

天明二年手黄仲夏

前和歌三条西亜相公福御門人

藤原良徳謹書之

### まとめにかえて

本誌関西大学『国文学』101は関屋俊彦氏の退官記念特集である。関屋氏のご専門は能・狂言で、舞台には夢幻能の世界が広がる。私も夢想和歌連歌をテーマに執筆させて戴いた。

今、心理学の広瀬隆氏のお勧めでアンドレア・ロツク著『脳は眠らない夢を生み出す脳の仕組み』<sup>27</sup>を読んでいる。新しい心理学の傾向がわかるということを読んでいるのであるが、専門分野が異なるということも難しいものかと思う。しかし心理学がフロイトやユングの時代より大いに進歩したということは痛感する。ベトナム戦争や中東戦争に出陣した若者たちの心理的治療のために心理学が急速に発達したという。恐ろしいことである。科学的な心理学、夢の研究などで新しい学問が進むことを願う。

〔注〕

- (1) 鶴崎裕雄・福島理子・広瀬隆・中川謙「シンポジウム『夢』との対話——連歌・文学・心理学の視点から——」『国際理解』42 帝塚山学院大学国際理解研究所 平二八・九
- (2) 以下、勅撰集の引用は『新編国歌大観』一（角川書店）による。ただし適宜、仮名を漢字に変更した。
- (3) 以下、『万葉集』の引用は『新編国歌大観』二（角川書店）による。なお『万葉集』の夢の歌については、前述の帝塚山学院大学の「国際理解サロン」のシンポジウム（注1）においてフロアーから『万葉集』の夢についても考慮すべきであるという神道宗紀氏のご指摘により、私なりに急遽まとめられたものである。
- (4) 『袋草紙』新日本古典文学大系29 岩波書店 平七
- (5) 『俊頼髓脳』新編日本古典文学全集87『歌論集』小学館 平一四
- (6) 小沢正夫・後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂『袋草紙注釈』塙書房 昭四八。
- (7) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』は昭和六〇年（一九八五）、国文学研究資料館で始まった「連歌資料のコンピュータ処理の研究」の成果で、平成九年（一九九七）明治書院の

刊行である。種々に利用されるが、本稿では緒言にいうように「一種の歴史資料目録である」として利用している。

- (8) 伊地知鐵男編 古典研究会叢書『連歌百韻集』汲古書院 昭五〇。江藤保定『宗祇の研究』風間書房 昭四二、金子金治郎『宗祇の生活と作品』桜楓社 昭五八にもこの序文の翻刻がある。（江藤保定『宗祇の研究』は跋文。）

- (9) 鶴崎裕雄「室町時代の紀行文に見る天神信仰・太子信仰——宗祇『筑紫道記』と三条西公条『吉野詣記』——」武田幸子編『太子信仰と天神信仰 信仰と表現の位相』思文閣出版 平二二

- (10) この夢想百韻については、古く米原正義氏の『戦国武士と文芸の研究』も取り上げられている。脇を詠む藤松は氏輝の息子かと考えたが、氏輝の息子には見当たらない。私（鶴崎）は当時の習俗である男色で、氏輝の小姓かとも考えている。

- (11) 『綿考輯録』出水叢書1 汲古書院 昭六三
- (12) 鶴崎裕雄「古田織部の連歌と茶の湯」『茶の湯文化学』23 平二七・三
- (13) 片桐繁雄「慶長出羽合戦」花ヶ前盛明監修『直江兼続の新研究』宮帯出版社 平二一

- (14) 『最上義光連歌集』第一集、第三集、最上義光歴史館平一四、一六(片桐繁雄氏解題・解説)
- (15) 鶴崎裕雄「三河国人連歌から天下の柳営連歌へ」『地方史研究』381 平二八・六
- (16) 『訂寛政重修諸家譜』一四 続群書類従完成会 昭四〇
- (17) 『東照山松樹院称名寺開山』<sup>三</sup> 歴代年譜 愛知県碧南市大浜の称名寺蔵。鶴崎裕雄「三河の国人連歌から天下の柳営連歌へ」『地方史研究』381 平二八・六
- (18) 『家忠日記』増補続史料大成19 臨川書店 昭五六。なお近年の研究書には、盛本昌広『松平家忠日記』角川選書 平一  
一、久保田昌希編『松平家忠日記と戦国社会』岩田書院 平二三
- (19) 鶴崎裕雄「家忠連歌の変遷——雨乞い連歌から京連歌へ——」『駒沢史学』85 平二八・三
- (20) 棚町知彌・鶴崎裕雄・木越隆三編『白山万句——資料と研究——』白山比咩神社 昭六〇
- (21) 鶴崎裕雄「中世・近世の地域支配と和歌・連歌の奉納——白山比咩神社奉納『白山万句』を中心に——」地方史研究協議会編『伝統』の礎——加賀・能登・金沢の地域史——雄山閣 平二二六
- (22) 中世公家日記研究会編『政基公旅引付』和泉書院 平八
- (23) 鶴崎裕雄「『政基公旅引付』に見る詩歌」小山靖憲・平雅行編『莊園に生きる人々』<sup>の</sup>政基公旅引付<sup>の世界</sup> 和泉書院 平七
- (24) 時慶記研究会編『時慶記』臨川書店 平二五
- (25) 史料纂集『舜旧記』続群書類従完成会 昭四八
- (26) 鶴崎裕雄・神道宗紀・小倉嘉夫編『月照寺』<sup>明</sup>石<sup>社</sup>奉納和歌集 和泉書院 平二三
- (27) アンドレア・ロック『脳は眠らない 夢を生み出す脳の仕組み』(伊藤和子訳・池谷裕二解説) ランダムハウス講談社 平一八
- (つるさき ひろお/帝塚山学院大学名誉教授)